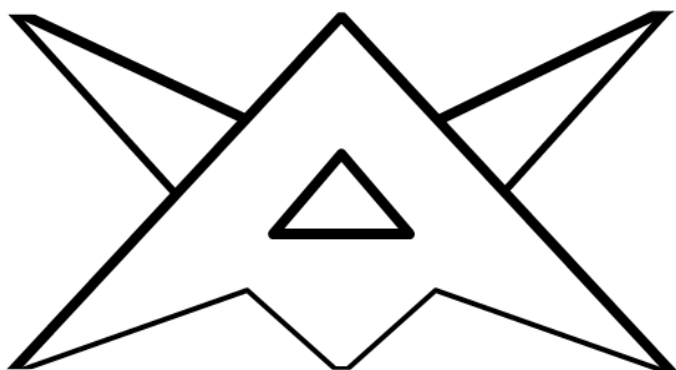


www.appendixman.com

アペンディクス・マン



ANGUS MCNEIL



CROWBAR[®]
media



CROWBAR
media

First published in Australia by Crowbar Media 2017
This edition published by Crowbar Media 2017

Text copyright © 2017 Angus McNeil
Cover Design © 2017 Crowbar Media

The moral right of the author has been asserted

This is a work of fiction. Names, characters, places and their incidents either are the product of the author's imagination or are used fictitiously, and any resemblance to actual persons, living or dead, businesses, companies, events or locales is entirely coincidental

APPENDIX MAN is a registered trademark of Astralgus Pty Ltd, used under licence by
Crowbar Media

ISBN (Print): 978-1-925658-12-5
ISBN (eBook): 978-1-925658-13-2

www.appendixman.com

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in or introduced into a retrieval system, or transmitted, in any form or by any means (electronic, mechanical, photocopying, recording or otherwise), without prior written permission of both the copyright owner and the above publisher of this book

Crowbar Media
248 McGeorge Road
PO Box 690
GISBORNE
Victoria 3437
Australia

第一章

メガヒーロー

アの子が何かとんでもないことをやろうと、いつ思いついてもい
しように、僕の受け入れ準備ができていればいいのに、と思
う。

「レオン、わたしメガヒーローになりたいの」

僕は親友デイジー・タックをぼかんとして見つめた。

「なにに、なりたいてって？」

「メガヒーロー、よ。レオン」

僕はまたも、ぼかんとした。

「スーパーヒーロー、じゃなくて？」僕が尋ねると、デイジーは首を振った。

「違うわ、世界はスーパーヒーローにはうんざりなのよ。もう古いし役不足だし、何度も登場しちゃったわ。『メガヒーロー』は全く新しい、別物なのよ」

「別物なの？」

「まったくのね」

「どこが、どう違うの?」

「メガヒーローっていうのは、スーパーヒーローみたいだけど、もっとすごくて、もっとパワフルだから、ただの『スーパー』じゃなくて『メガ』級だってこと。わかる?」

「ううん」

「わたしを信じてないでしょう?」

「信じてないな」

「そう、困ったわね。どっちにしろ、わたしはやるけど」

僕はイスをぐるりと回して、持っていた雑誌を床にすてた。

「わかった。じゃあ、なんで?」僕は注意深く尋ねた。

「だってね、レオン」デージーは、急にいつもより太い声で、宙を見つめて言った。「現実を見てよ。街はおかしなことになってるわ」

「そう?なんともないと思ってたよ」

「今や、メルボルンの人たちは、憧れる偶像を必要としているのよ。わたし達の街の一番の暗がり、一筋の光を求めているの。何か問題が起こったとき、市民の誰かが、何をしてでも防いでくれる、と思いたいよ。この大変な世の中で、ヒーローを必要としているの。レオン、そしてそれって、全く、このわたしのことなのよね」

デージーの部屋のライトに照らされて、焦げ茶で少しカールのかかったデージーの髪は、まるで仕事の会議にやってきたピエロみたいに目立っていた。確かに、うちの学校の17歳の女の子の中では、デージーは背の高いほうかもしれない。でも、一番じゃない。一番ガタイがいいわけでもないし、強いわけでもない。実を言えば、デージーより

速く、僕をプレッツェルみたいに縛り上げることができる女の子を、しかも楽しんでやっちゃいそうな子を、3人は拳げることができた。

デージーが悪と戦うガラかどうかは、疑わしかった。

「分かったよ」僕は始めた。「えっと、ちょっとギモンが浮かんできたんだけど、まず、きみには超能力も何もない。どうやって、悪と戦うんだい?」

デージーはにっこりした。

「世界一のヒーローっていうのは、自分を信じるだけでいいのよ、レオン。それが全てを超える力になるの」

「それが全てを超えるクリーシェだな」僕は言った。「次に、そういう仕事をする人っていうのが、すでに存在する。消防士、警官、救急隊員。どうやって、きみが助けることができる?たったひとりの手で、街の悪、全てと戦うつもりだい?メルボルンはそんなに危険なわけじゃない。世界で一番住みやすい街、に名が拳がってると思うよ」

「わたしは、全ての悪と戦おうとは思ってないわ」デージーは答えた。「メガ悪党だけよ」

「3つめのギモンは、一体どうやって…なんだって、メガ悪党?」

デージーは頷いた。「そうよ」

「デージー、メガ悪党って、なんだい?」

今度はデージーが僕をぼかんと見つめる番だった。「とってもわかりやすいと思うんだけど、ボクちゃん。とってもヤバくてとってもパワフルすぎて、もう『スーパー』級なんかじゃない悪党のことを—」

「分かった、わかったよ」僕はさえぎった。「よくわかった」

「この世の不正行為を成敗してくれる、警察がいることは、知ってるわ。でもスーパー悪党に立ち向かって、戦えるだけの人じゃない。ましてや、メガ悪党なんてね」

デージーはベッドへ歩いていくと、ドサッと仰向けに寝転がって、天井に貼ったアメリア・イヤーハートのポスターをじっと見つめた。

「違うのよ。人々が求めているのは、本当に悪いやつ、いつなんどき人類を滅亡させるや知れない、狡猾で危険な悪魔みたいな悪党と、戦ってくれる人なの」デージーは拳をしっかりと固めて言った。

「そうだね…」僕は、慎重に言った。「分かった。じゃ、その仮のメガ悪党が、メルボルンにどうにかしてやってきた。きみがどうやって食い止める?戦いに面したことって、ある?」

デージーは、考えが行き詰まったときにいつもするように、眉間にしわを寄せた。

「テコンドーを知ってるの」

僕は鼻を鳴らした。「いや、知らないだろう」

デージーは背筋を伸ばした。「知ってるわよ。習ったことがあるもの」

僕はまた鼻を鳴らした。「ああ、そうだったね」

「完璧によ。黄色い帯に、緑が一本入ってたんだから」デージーは満足したようにベッドに座り直した。

僕はデージーを見つめた。「それって、下から数えて3番目じゃないの?」

デージーは肩をすくめた。

「黒帯だとか、黄帯だとか、熟練者だとか初心者だとか。あれはみんな、実に同じことなのよ。それに」デージーは前のめりになって、僕目をじっとみて「『技術的に』上手かどうかでことじゃなくて、どのくらい見極めて、自信があるかが大事なのよ、ここでね」と自分の頭を軽く叩いた。「自分の力を信じなさい、ってことよ、レオン」

僕は額をこすった。この会話に、頭痛がしてきたのだ。

「よし、じゃあ、戦う相手は誰だい？お向かいのスマート夫人かい？」僕は冷やかして尋ねた。「ああ、そうだ。そういえば新しく飼った子犬が、ゾンビウィルスにやられたかも、って言ってたな」

デージーはベッドから立ち上がると、僕を無視して、自分のパソコンへ戻った。旋風のように、インターネットのページを行き来してはキーボードを叩き、スクロールしたりクリックしたりし、早口でしゃべるので、僕はついていくのに精一杯だった。

「ほらここにあるわ」デージーは始めた。「世界のすべての人々を脅かしている人ね。彼は頭がいいし、危険よ。それにもう、かーなり長いこと、警察の手にかからずにいるの。わたし、しばらくこの人のことを研究してたんだけど、レオン、この人がどこに居て何をしているのか、でも手がかりがなくて」

僕はあきれた顔をした。「なんてことだ。どうしたんだろうね。それで、その人って誰？」

デージーはキーボードを叩くのをやめると、イスをまたぐるりと回して僕の方を向いた。そして少しの間。まるで巨大爆弾をキャッチする準備をさせるかのごとく、僕のことをじっと見つめた。

「ドクター・グリーンよ」

部屋全体が、ゆっくり数えて10秒は沈黙したあと、デイジーは僕の視線から逃れるとぐるりとパソコンへ向き直り、無我夢中でキーボードを叩き始めた。

「えっと、デイジーさん？」僕は、始めた。

「んん？」

「ドクター・グリーンって、誰なの？」

デイジーは軽蔑の眼差しを向けた。

「世界でまだ誰も見たことがなかった、というか、少なくともまだ見てない、下劣でたちが悪くて危険、卑劣でねじけたペテン師。裏表がある頭脳明晰な悪党よ。ほらここ」デイジーはそう言って、パソコンの画面を僕の方へ向けた。

「レオン・ベイカー君。ドクター・グリーンにお目見えです」

画面には、セキュリティ・カメラの写真が映っていた。形は見えたが、顔はあちらを向いていて、サラダバーに並んでいる。画像は不鮮明すぎて細かいところは何も見えない。僕が見えたのは、痩せ型で、なんらかの、長くて白いコートを来て、髪は全部ぺったんこではない、くらいのところしか見えない。画面には緑の矢印がこの怪しい男に向いていて、ページの右側にこのように書かれていた。

氏名：ドクター・オーレリアス・グリーン、博士号（環境科学）

年齢：不詳

身長：不詳

好きな色:ミドリ(未確認)

僕は、その下にメモ書きがあるのも見た。

悪の科学者

「悪の科学者?それだけ?」

「そうね、言ったでしょう。この男が本当に存在するか誰も知らないんだって」

僕がこれを静かに再度読み返した後、デイジーをみると、自分のオフィス・チェアにもたれて、目を閉じていた。

「ディー?」

デイジーは目を開けて僕を見た。「何?」

「真剣に信じてるわけじゃないよね?」

デイジーはあきれた顔をした。

「もちろん信じてるわよ!」デイジーは言った。「アッシュは世界中のメディアの中でも、いちばんの有力者と言われる人よ。世界のどの政府でも一般市民に知られたくない情報を、アッシュはしってるの。そのアッシュが、ドクター・グリーンみたいな人間のカスを恐れちゃいけない、って言ってるの」

「ちょっと待ってくれ。少し、巻き戻し」僕は言った。急にわけがわからなくなったからだ。「アッシュって、誰だ?」

「あれ、このウェブを書いた人よ」デイジーは例のホームページに

クリックして戻るとそう言った。それは、シンプルな黒い背景に、飛び出すように派手な青字で綴られていて、見ていると僕は涙目になった。「彼にあったことはないわ。でも私が悪者を一扫するようになったら、きっとしょっちゅう会うことになるでしょうね。こういうことに関しては、天才だって聞いたから」

デージーは、椅子の高さを直すと、パソコンのキーボードへ覆いかぶさった。

「実際、そろそろこの人へ、メッセージを送る時期かな、とは考えてるの」黙想して微笑んだ。「期待していただこうかな、と思ってね」

「待てよ、本当の本気で、メッセージを送って、きみが、その、スーパー…」

「メガ、よ」

「メガヒーロー？」

「違うわよ」デージーは、僕がまるで地球始まって以来のお馬鹿さんかのように、呆れて答えた。「アッシュには、助けが向かってるからって知らせるだけ。あくまで控えめにいきたいの、わかるでしょう？レオン」

そして、話は終わった。デージーはパソコンに注意を向けた。まるで、僕はもう部屋には居ないような扱いだった。

僕がオーストラリアに引っ越してきたときから、デージー・タックは僕の親友だった。最初にあってからもう10年になるけど、まだ僕たちは放課後、ほぼ毎日一緒に過ごす。デージーは突飛で熱狂的な女の

子で、めっちゃめっちゃ新鮮な、キチガイネタを会うたびに思いついている。完璧な青天の霹靂、その場で突如思いつくこともあれば、時には、僕にその考えの切れっ端やヒントを小出しにして、何ヶ月もアイデアを練ることもあった。うまくいくものもあれば、そうでないものもあった。デージーが、やってみよう、といつでも準備OKなのに比べて、僕はそうでもないときもあったけど、でも何にしろ、いつだって、成功させようって頑張ることが、すごく楽しかった。

何年も前の、あの日のこともまだ覚えている。

僕はまだ新しい学校へ入ったばかりの7歳の少年だったから、新しいクラスに誰ひとりとして、僕の友だちになってくれる人がいなかったら、と心配するあまり、そのアカツキには急病の仮病を使って抜け出す計画まで立てていた。教室へ入っていくと、子どもたちは自分の席についていて、先生が何か話している間、お絵かきや塗り絵をしていた。先生が僕に気づいて手をたたくと、教室全体が水を打ったような静けさになり、僕を邪魔者のようにじっと見つめた。学期はすでに数週間前に始まっていたので、皆ははっきりと、グループや友人の区別をつけていたのだ。

僕なしで。

「いらっしゃい、レオンくんね？」先生の声が響いた。先生は自分の机から立ち上がり、僕の方へ歩いてきた。教室全体の中でただひとつの、にこやかな顔だった。僕の高さに合わせてかがむと、先生は「私は、ヒューズ先生です。こんにちは。大丈夫？」

何かを口にだすのが怖すぎて、僕はただ頷いた。

「少し緊張しているのかな？」先生は、明らかに顔をしかめて見せるとたずねた。

僕はもう一度頷くと、指を鼻へ持っていった。そうしているのが一番落ち着いていた。

「大丈夫よ、レオンくん。このクラスのみんなはとてもいい子だし、あなたのお友達になりたいと思ってるわ」

ヒューズ先生はその場で立ち上がると、沈黙している教室の方へぐるりと向きを変えた。

「みんな。今日から新しいお友達が増えました。お名前は、レオンくんです。家族みんなで、香港から帰ってきたところで、このクラスに仲間入りしてくれます!じゃあ、3つ数えますから、みんなで『レオンくん、おはよう』って言えますね。いいですか?1,2,3—」

子どもたちは、もごもごと「レオンくん、おはよう」と言った。みんなが僕の名前を知ってると思うと、少し気が楽になった。

「いいわ。じゃあ、レオンくんが誰の隣りに座るか、探してみましよう」ヒューズ先生が言った。「レオンくんのお隣に座りたい人?」

教室を沈黙が襲った。僕はまだ指を鼻へ持っていったままで、他にどうすればいいかわからないでいた。子どもたちは、あまり自分が目立たないように、きまり悪そうにしていた。

「だれかいませんか?」ヒューズ先生は、まるで何も心配するようなことではないかのように、まだニコニコしたまま、たずねた。子どもたちは、もっとしんと静まり返った。クレヨンのお絵かきに戻ってしまった子供もいた。そして、僕がずっとひとりでいようと心を決めた時、突然

甲高い声が教室の奥の奥の方から聞こえてきた。

「私が隣に座ります」

髪にヘアピンをつけすぎてる感じの、痩せ型の子が立ち上がって手を上げていた。並んだ机の一番後ろの、その子の隣に、席が一つ空いているのが見えた。

ヒューズ先生はにっこりして、僕の方を向いた。

「さあどうぞ。あそこへいって、デイジーの隣にお座りなさい」

「はい」僕は言った。鼻から指を離し、少しは人気が出てきた気分になって、通路を歩いてその席へ向かった。その子の隣の空いた席に座った。

「こんにちは。私はデイジー」その子が言った。

「やあ」僕は答えた。

「あなたは、何ていうの？」

「レオン」

「好きな動物は？」

「ええと…トラかな」

「私はライオン。赤いクレヨンがいい、それとも青いの？」

「ええと…赤いの」

その日僕達が何を描いたんだったか、もう思い出せない。その後の授業で何があったかさえも、思い出せない。覚えてるのは、その日以降、僕はずっと、新しく友だちになった、デイジーの隣、教室の一番後ろの席に座っていた、ということだけだ。そして、遠いあの日から、さして変わったところはない。